総論・広域圏の垣根を越えたイベント

一　地域づくりの取り組みの概要

①　背景

秋田内陸地域は、秋田県の中央部からやや北寄り、「十和田・八幡平国立公園」の西側に面し、国道一〇五号線と平成元年四月全線開通し第三セクターで運営されている「秋田内陸縦貫鉄道」沿線に位置する。

また、本地域は、二つの郡にまたがり、・みちのく小京都「角館」や・日本一の深度を誇り神秘と伝説の湖「田沢湖」・朝の優しい日差しに映えるフラワーロード「西木村」の仙北郡三町村と、・山の神を崇拝し生活し、また、北緯四〇度線に位置するマタギの里「阿仁」・ブナの原生林や貴重な野生鳥獣・高山植物群の宝庫「森吉町」・ヨーロッパ・北欧の風土を思わせる北欧の杜「合川町」・秋田杉の生産県内一の「上小阿仁村」・世界一の大太鼓の里「鷹巣町」の北秋田郡五町村から構成されている。

このように奥深い山々が続く県内でも最も厳しい気候風土を有する地域だけに、近年の社会経済情勢の変化の中では、・過疎化（人口減少）・高齢化等が著しく進展し、これに伴う後継者不足が地域経済を揺るがす深刻な課題となっていた。

一方地域においては、永年の悲願であった地域の足となる秋田内陸線（旧国鉄六角線～昭和六一年からは第三セクターによる部分開業）の全面開業（平成元年四月一日鷹巣～角館九四・二キロ）を目前にその利活用や国のリゾート開発、空港建設構想等の地域課題として浮上していた。

②　きっかけ

こうした状況の中、昭和六三年五月鹿角市・大館市・能代市の青年の絶大なバックアップにより鷹巣阿仁青年会議所が誕生し、その事業として初めての取り組み「まちづくりシンポジウム」を開催した。その中において「秋田内陸部におけるリゾート開発の核として鷹巣町を軸とした『リングロード』」が提唱された。

県ではこの構想が秋田県のリゾート構想「北緯四〇度シーズナル秋田」の中に組み込み位置付け、後日国の認定を受けた。

このような事情を背景に、自分たちも積極的に参画することとして、昭和六三年十二月三日三市八町六四名からなる「大規模リゾート地域連絡協議会」を発足させた。

③　その後の変遷

同協議会の活動として、「地域の活性化と未来創造」に向け、長期的展望に立った地域おこしアイディアが浮かび上がった。

一　昭和四〇年代に姿を消したＳＬを秋田内陸線に走らせリゾート地域の目玉に結びつけたい。

二　田沢湖と国道一〇五号線を使い、当時注目を集め出した「トライアスロンレース」の開催。

三　前記一、二の事業をスムーズに進めるための広域親睦交流イベントとしての「綱引き大会」。

そして、その実現に向け具体的な検討を開始したが、検討を重ねるにつれ、あまりにも大きな問題にぶち当たった。

ＳＬ構想は、二一億という資金調達面等で、トライアスロン構想は、「田沢湖」の水温差とコースの安全性等から、「綱引き大会」は、斬新さがないということから、これは断念せざる得なかった。

しかし、アイディアは良いのだから手法を変えたらと考え続けた結果、トライアスロンがだめでも、同じ鉄人レースのウルトラマラソンにして、沿線地域の素晴らしさを大自然の雄大さを全国にアピールできる「一〇〇キロマラソン」構想が誕生した。

この構想が可能なら、地域の誇れる大自然の

大会会場に同時開催の地域物産まつり

素晴らしさを全国の多くの人々にアピールできる、しかもこのスケールだとインパクトも大きい。

誰もが素人なため、競技経験者からのアドバイスを受けながら計画書を作成し、関係町村・団体・県警等まで、その趣旨を説明しながら協力支援の要請に奔走したが、無名の若者集団が夢だけを語っても、隣郡の仙北地区をはじめ理解が得難く身元調査までされる始末。

結局、行政機関をはじめ国道使用許可すら認められず、断念の直前まで追い込まれたが粘り強く関係機関等に働きかけた結果、「地域の若者による自主的な理念と情熱をもった活動」への理解がようやく得られ、大会参加のメドが見えてきた。

こうして、大規模リゾート地域連絡協議会の若者メンバー（大曲・大館・鹿角・鷹巣阿仁青年会議所、鷹巣・阿仁・合川・森吉青年会、各農業青年団体）達が、その夢の実現に向けて、そのまま大会の実行組織となって、まさに住民が主体となった広域的地域づくり組織「北緯四〇度秋田内陸リゾートカップ一〇〇キロチャレンジマラソン実行委員会」が本格的な行動を開始した。（設立当初の構成員六四人、現在は、二〇〇人）

④　具体的な取り組みの内容

一〇〇キロチャレンジマラソンは、「一〇〇キロ」の部と「五〇キロ」の部と二種類があり、一〇〇キロの部は、一〇〇〇人を超えるランナーがまだ夜も明けぬ午前五時号砲を合図に「みちのく小京都」角館の町をスタート、十三時間にも及ぶ人間鉄人レースの火ぶたが切られる。標高差五〇〇メートルを超える苛酷なレースで、早朝にもかかわらず、沿線には地元の声援が飛び交い、ゴール地点の鷹巣をめざす。

コース上には、ドリンク・果物・おにぎりなどの食べものや、アイシングコーナーなど設けたエイドステーションが設けられ、さらにはエイドとエイドの中間にも飲料水の準備がなされている。また、四つの制限時間のチェックポイントがあり、その時間を超えると時間内完走は無理と言うことで収容バスにてゴール地点まで運ばれる。

トップランナーがゴールを目前とする午前十一時「マタギの里」で有名な阿仁町からも五〇キロの部のランナーが一斉にスタート、一〇〇キロ・五〇キロの部ともに入り乱れてゴール地点鷹巣町をめざし思い思いに力走、エイドステーションも駆け込むランナーの対応にてんやわんやの大忙し、沿道からも、車の中からも、内陸線の列車の中からも、ランナーに向け熱い声援が飛び、ランナーもこれに応えて手を振って答え、ゴールまであと一キロ地点の鷹巣町商店街からは、「もうダメか」と思っていたランナーも、最後のパワフル魂が声援に応え、店主も客も商売そっちのけで声援する感動的なシーンが繰り広げられる。

完走できるランナーは、六割程度、途中でリタイアを呑んだランナーも来年に向け、明日に向け悔しさをぶっつける。このため全国から集まる人々は増える一方。

こんなドラマの陰には、この日のために企画・準備をしてきた住民スタッフとそれを支えた町村毎地域住民ボランティアの地域への思いとまごころ対応があったからである。

大会終了後ホットする暇も無く、大会の後始末と次回開催に向けての諸準備が始まる若者達の挑戦には終わりがない。

こうして難産の末誕生した若者の地域に対する夢「北緯四〇度秋田内陸リゾートカップ一〇〇

キロチャレンジマラソン大会」は、平成元年度の第一回大会を開催してから早八年、今年の第八回大会は、過去最多のランナーを得て成功裏に終えたばかりである。

この間、参加ランナーは、第一回の六八名からはじまり年々増加を続け、今年の第八回目の大会においては、一四八九名と当初の二十二倍にも増加し、しかも、その八割が県外参加者で占められている。

これにつれ、スタッフ・ボランティアの数も次第に増加を続け、その数は大会当日だけで、現在は一八〇〇名とその広がりをみせている。

また、この間、アンケート調査や医学調査等を行いながら、企画運営の内容に検討を重ねながら、平成六年には、地域特産品開発・販売・PR等を図ることをねらいとして、沿線八町村の物産協会が連携し「一〇〇キロマラソン物産振興協議会」を設立、平成八年度の大会会場において四〇張のテントで販売コーナーを設置した。

また、昨年第七回大会では、パネリストに森巌夫教授等を迎え、地域の人々と共に自然を生かした地域おこしの在り方を探る「九五自然と共生シンポジウム」を同時開催するなど、積極的な広域的地域づくりの活動を展開している。

⑤ 取り組みの成果、地域に与えている影響

一　若者からお年寄りに至るまでの地域ボランティアが増加し、住民の積極的な参加が得られてきている。

二　大会への参加にとどまらず、各地域において開催される色々なイベント等に対しても企画

今度の選手はどうやって迎えようかな

段階から積極的に参画し、自らの地域は自ら作り上げようとする意欲が高まってきている。

三　実行委員長のバトンリレー（現在三代目全国初女性実行委員長の誕生）や大会運営の重要ポストへの登用など、大勢の住民の参加体験は、地域の人材・担い手の育成にも寄与している。

四　厳しい世界情勢の中においても、一年間かけての大会準備をはじめ当日の大会運営等、自らが描いたコンセプトの探求に大会スタッフ一同前向きに取り組み続けている。この姿が、年々企業や行政の支援の増大や地域の人々からのさらなる理解のへの深まりとつながっている。「継続は力なり」

五　ボランティアなどに直接参加していない地域住民も、沿道で出場ランナーへの声援を送る、また、黙っていられず自分の玄関

先に、私設エイドステーションを設置してしまうなど、大会を住民が一丸となって盛り上げている。

六　参加ランナーなどの受け入れをする旅館・ランナー・家族・応援者を輸送する秋田内陸縦貫鉄道、さらには一〇〇社にも及ぶ協賛企業などが、この大会に支援・協力をし続けている。

七　郡境・山間地が続く為、自衛隊からも無線連絡、給水補給等の大会スタッフとしての継続した支援をいただいている。

八　地域住民と参加ランナー・同伴者のふれあい交流が図られ、熱い感動のドラマが繰り広げられている。

これが、全国への情報発信の源でもあり出場ランナーの増加にもつながってきており、リピーターも多い。

（各エイドステーションの人情にふれたくてとか、ランの途中で地域住民から民謡を聞かせてもらい激励されたそのお返しにと自国の民謡を歌ったなど、このふれあい交流に感激して、毎年これを楽しみに参加している）

九　八割を占める県外からの参加ランナー、これに同伴する家族や友人たちが、沿線地域の素晴らしい大自然や地域の人々のまごころに触れることにより、広く全国に口コミによって情報発信され、地域イメージの向上が図られている。

十　三五〇〇人を越える参加者、大会関係者及び大勢の応援・観客等の集まりにより、宿泊・お土産・交通費等による地域経済への波及効果が生まれている。

（宿泊・土産・交通費等～約一億七〇〇〇万円）

十一　各地の物産協会が一体となり、一〇〇キロマラソン物産振興協議会の自主的な活動がみられ、産品開発・流通販売に力を入れ起業化をめざしている。

十二　地域住民の理解が、リゾート開発の推進・内陸線の活性化、大館能代空港の建設等の地域の振興へ大いに貢献している。

⑥　今後の展開

秋田県のリゾート構想地域を全国に紹介するために、一〇〇キロチャレンジマラソン大会を開催し、各地のスポーツ愛好者と交流しＰＲすると共に、リゾート地域としての秋田の自然豊かな環境にふれてもらうことにより地域イメージと地域住民の意識改革の向上をめざす。

また、全国へ向け秋田県独自の「住民・企業・行政」とが一体となってつくりだす「地域づくりの発信の拠点地」をめざす。

スタート準備を終えた面々

さらには、物産振興協議会を軸に新たな物産開発（地域資源の高付加価値化）を図り、一次産業へ結び付く（起業化）展開を繰り広げたい。

二　おわりに

秋田内陸リゾートカップ一〇〇キロチャレンジマラソンでは、以前、大会参加ランナーに当地のマラソンに対する評価の外に、秋田県とか秋田県人に対する印象などについてアンケートをとったことがありました。

アンケートの回答の中には「秋田は暗いイメージでとらえていたが来てみると随分明るい印象を受けて驚いた」、「秋田の人はなぜみんなあんなに優しく親切なのか不思議だ」、「自分も秋田県人のように素直で親切な人間になりたい」などというもののほかに、「秋田の人と結婚したい」などというものもありました。

毎年の大会参加ランナーが秋田内陸路の一〇〇キロを走破するために様々な触れ合いをするなかで実感されたことが、全国のいろんなところで語りつがれていることを想像しますと本当に素晴らしいことだと思います。

参加ランナーの皆さんの印象とか評価のなかに少しずつ、そして着実に実現し、今年もまた大きく広がっていく意義の大きさを考えるべきではないでしょうか。

今後、これをどのようにとらえ、生かしていくのか、またあらたな挑戦が始まる。